

# 「旅」をテーマに誕生した秀逸なミニッツリピーター

ルイ・ヴィトンは常に原点である「旅」を製品開発の柱としてきた。複雑時計も同様で、2011年、セカンドタイム表示を備えるミニッツリピーターを発表。しかもそのリピーターは旅先で我が家の時刻を知るため、という心憎い設定にブランドの発想の広がりを感じ取ることができる。

シャネル、シヨーム、ルイ・ヴィトン、

掛けていることである。

ティファニー、そしてハリー・ウィンストンなど、いわゆる有名メゾンたちがこぞって腕時計に興味を示し、時計づくりには本腰を入れたのは2000年前後のことであった。もちろんその裏には、こうしたファッション総合メーカーが参入するだけの魅力が、その当時の時計市場にあったからである。多くの時計専門メーカーといささか異なっていたのは、時計自体を近視眼的な目で見るのが少なく、より自由な発想で製品を造り出すことであり、さらにバックにある絶対的な資金力を基に新製品の開発や展開、さらにPRなどを行なってゆくことであった。たとえば、見栄えのするクラシッくなスタイルや、魅力的なモダン・デザイン、あるいは新素材の導入と言った具合に、時計に対するアプローチもそれぞれ微妙に異なっていたが、面白いのはこうした殆どすべてのメーカーが高価で見栄えのするトゥールビヨン・モデルを手

御存知のように、これらのメーカーの中で見事に成功を勝ち取った1社が、ルイ・ヴィトンである。その要因のひとつは、斬新で個性的なタンブールのケース・デザインにあると言っても差し支えないだろう。2002年に登場したタンブールは「旅」をテーマに、クロノグラフ、ダイヤル、GMTと、時計専門メーカーに引けを取らないまでの多彩なコレクションを瞬く間に構築していったが、早くも2005年にはトゥールビヨン・ウォッチを発表し高価格帯へと進出を図る。そして、それに続く次なるステップが、2011年にデビューした初の超複雑モデル、つまり、ここに採り上げた「ミニッツリピーター」と言う訳である。

が、そのサイズはタンブールがもつボリュームに負けないだけの大きさで量感を備えたものである。言うまでもなく、近年のリピーターに相応しく、防水機能は3気圧が保証される。

半透明のサファイア・ダイヤル越しに見える新開発のムーブメントは、手巻き式のCal. LV178(2万1600振動、パワーリザーブ約100時間)である。エスケープメントには最新技術が導入されており、シリシウム製のアンクルとガンギ車が使われる。いっぽう、ファンクションはリピーターのほかに、旅先で真価を発揮するセカンドタイムとデイ&ナイト表示、パワーリザーブ・インジケーターなどの各機能がかつちりと脇が固められる。

ローカル・タイム用の長短針の視認性を損なうことはない。また1時半に置かれたパワーリザーブ・インジケーターは少しばかり変わった形式が採用されており、長い1本の針が「+」に加え、100時間までの残り数字を表示してくれる。

さて、肝心のミニッツリピーターは、ホーム・タイムに連動している。つまり、旅先で自宅の時刻を確認するときに、チャイムでその時刻を知らせてくれる訳だ。むろん、ローカル・タイムを中央の時分針に揃えておけば、通常のミニッツリピーターとしても使うことができる。2つのゴングと2つのハンマーで作り出されるその音は、「個人的な行為であるため、あえて大きな音量を求めなかった」というルイ・ヴィトンの説明とはやや異なり、そこそこのボリュームで、優しく心地よい音色を奏でてくれた。同時に音の間隔を一定に保つスロー・ガバナーの作動音は、その回転速度を高速化することによって極めて低いレベルに抑えられていた。



ミニッツリピーターとセカンド・タイムを装備したグランド・コンプリケーション・ウォッチ、タンブール・ミニッツリピーター。長短針がローカル・タイムで、中央のディスクでホーム・タイムとデイ&ナイトを表示する。現在時刻は1時50分で、自宅は夕方6時である。1時半がパワーリザーブ計で、ゼンマイの残りは0時間/マイナス(レッド・ゾーン)を示す。ムーブメントは旧ファブリケ・デュ・タンの手になる手巻き式のCal.LV178(直径30.0mm×厚さ6.5mm)で、同社はその後、ルイ・ヴィトン・グループ傘下に収まった。



本機の特徴のひとつは、タンブール・トゥールビヨンと同様、自分のイニシャルを入れたり、ジュエリーをセットしたりと、各部のカスタマイズが行えることである。注文から納品までは約1年間かかる。ここに紹介したモデルは、18KPGと同WGが合わせて4個製作されたスペシャル・バージョンのひとつで、後者の参考価格は2908万5000円。さらにラグとフランジにダイヤモンドをセットした場合には、同じく参考価格だが、2966万2500円となる。

## ロレックス「オイスター・パーペチュアル・スカイドウエラー」

# ロレックスの真髄発揮のセミ・コンプリケーション

1990年代後半から次第に各社が開発に着手している年次カレンダーにロレックスが挑戦した。GMT機能を併せ持つ、ロレックスとしては初めてのセミ・コンプリケーションだ。その随所にはユーザーフレンドリーを基本とするロレックスの細やかな開発の姿勢がみてとれる。

通常のカレンダー・ウォッチとは異なり、大小の月を見分け、さらに閏年であっても日付け修正の必要のない永久カレンダーは、時計産業が長い年月をかけて造り上げた魅力的な複雑機能のひとつだと思ふ。現在生産されるモデルの少ない欠点は、この種の複雑時計の宿命ゆえ、とても高価なことだ。また、大多数のモデルではデイ・デイト、マンズ、リープイヤーなどの各表示を、限られた大きさしかない腕時計の文字盤に詰め込んでしまっているため、ややもすると視認性が良くないことの2点が挙げられる。

これと比較すると、1990年代の後半にパテック・フィリップが先鞭をつけた年次カレンダー・ウォッチは、ある程度身近な存在である。機構を簡素化することによって、価格を大幅に下げたこのモデルの特徴は、2月の最終日の25時に、日付けの修正を行なうだけで、ほぼ永久カレンダーと同等の動きをしてくれることだ。従って、好評をもって受け入れら

れた年次カレンダーは、ゆっくりではあるものの次第に増え続けているが、その理由のひとつは、腕時計がもつ様々な機能の中にあつて、極めて利便性が高い、知的なシステムを搭載しているからにちがいない。

さて、2012年の話題作であるロレックスの年次カレンダー・モデル、オイスター・パーペチュアル・スカイドウエラーが販売開始された。その特徴はいくつか存在する。まずひとつは、名称の元となった年次カレンダーとセカンド・タイムの両表示を装備しており、時刻の変更を含めた修正には2007年に登場したヨットマスターIIと同様、ベゼルを使用する独自のシステムが採用されていることだ。そして、ふたつ目は、ロレックスにとって、初のセミ・コンプリケーション・モデルということである。

9001 (COSCクロノメーター、40石、2万8800振動、パワーリザーブ約72時間)で、同社の最新技術であるパラクローム・ヘアスプリングとパラフレックス・ショックアブソーバーを装備する。いっぽう、文字盤にちりばめられた各表示は、先にも触れたように視認性に優れたものだ。まず、中央の3針が現地時刻(ローカル・タイム)で、基準時刻(ホーム・タイム)は下側にオフセットした24時間表示の回転ディスクから読み取ることができる。そして、ローカル・タイムに連動した3時のデイトはお馴染み2・5倍のサイクロップ・レンズつきで、マンズはダイヤル周囲のインジケーター外側の窓に控えめに表示される。

デイトールを見てゆこう。フルテック・ベゼルに装備された、回転式コマンド・リングの使い方はきわめて簡単だ。ベゼルの左回りに動かして、それぞれ3つのポジションを選び出したのち、リュウズを使って早送りや修正の操作を行な



年次カレンダーとセカンド・タイムの両機能を装備した、ロレックス初のセミ・コンプリケーションとなるスカイドウエラー。セカンド・タイムは24時間制のディスクで表示され、その上の赤い三角形の指標はチャーム・ポイントにもなっている。マンズはインデックス外側の窓に表示(現在は8月)される。2つの時刻表示は、本文ではホーム&ローカル・タイムとしたが、中央の3針がホーム・タイム、24時間ディスクをセカンド・タイムとして使用することもできる。写真はアリゲーター・ストラップ仕様の18Kエバーローズゴールド(チョコレート・カラーのダイヤル)で、価格は392万7000円。ほかにプレスレット仕様もあり、18KYG(同シャンパン)が457万8000円、18KWG(同アイボリー)が485万1000円となる。

# IWC アイ・ダブリュー・シー

© IWC 03-3288-6359

**F1テクノロジーと  
クラシックカーの  
雰囲気を採り入れた  
新インヂュニア**

IWCは毎年、ひとつのコレクションに焦点を当てて新作を発表しているが、今年「インヂュニア」の年となった。そしてIWCはメルセデスAMGベトロナスフォーミュラワン™チームのオフィシャル技術パートナーとなったことから、インヂュニアの新シリーズにはレーシングカーと同様にカーボンやセラミック、チタニウムなどの素材が使われ、従来とは異なる個性が作られた。またメルセデス・ベントンの往年のレーシング・カーもイメージソースとなっている。最高機種は左ページにある複雑時計で、計9ライン18型が発表された。

「インヂュニア・クロノグラフ・ジルバープファイル」。メルセデス・ベントンの伝説的なレーシングカー、シルバー・アローW25に因んだモデルで、裏蓋にはシルバー・アローが刻印されている。ペルラージュ仕上げの文字盤が特徴的で、これもシルバー・アローのペルラージュ仕上げのスチール製ダッシュボードに由来する。12時位置に12時間計と60分計を同軸においた、自社製自動巻きクロノグラフ、Cal.89361（38石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約68時間）を直径45mmのステンレススチール・ケースに搭載する。12気圧防水。価格111万3000円。4月発売予定。



「インヂュニア・パーベチュアル・カレンダー・デジタル・デイト/マンズ」。2007年に発表した自社製自動巻きクロノグラフ、Cal.89000に永久カレンダー・モジュールを付加し、2009年にトノー型のダ・ヴィンチでデビューしたCal.89802（51石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約68時間）を搭載。月、日付、閏年をデジタル表示するが、毎晩、日付の切り替えで放出するエネルギーを蓄え、月末には全エネルギーを放出して日付と月表示を同時に切り替える。ケースにはチタニウムアルミナイドと酸化ジルコニウム（黒の部分）を使い、軽量化と耐久性の強化を図っている。ケース径46mm。12気圧防水。価格421万5000円。12月発売予定。



「インヂュニア・デュアルタイム・チタニウム」。直径45mmのチタニウム・ケースにチタニウムカラーの文字盤、ブラックのラバーコーティングを施したリュウズ、リュウズプロテクター、そしてブラックのラバーストラップのコントラストがモダンなデュアルタイム・ウォッチ。先端が矢印の針が文字盤外周の24時間リングを指し、第2時間帯を示す。自動巻き、Cal.35720（27石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約42時間）を搭載し、12気圧防水を保障する。ケース径は45mm。価格74万5500円。5月発売予定。

「インヂュニア・オートマティック "AMGブラックシリーズ・セラミック"」。メルセデスAMGに敬意を表してデザインされたモデルで、ケース、ベゼル、リュウズ、リュウズプロテクターにセラミックスを採用している。インヂュニアSLのデザインの流れを汲んでいるベゼルの5つのビスはケースリングと裏蓋を両側から固定する役割をもつ。2005年に発表した、ペラト巻き上げ機構を装備する自社製自動巻き、Cal.80110（28石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約44時間）を搭載。ケース径は46mmで、サファイアクリスタル・バックとなっている。12気圧防水。価格112万8750円。9月発売予定。

「インヂュニア・オートマティック」。往年のインヂュニアを知る人にはもっとも親しみやすいモデルだろう。1976年にジェラルド・ジェンタによってデザインされた、ベゼルの5つのビス穴が特徴の「インヂュニアSL」のデザインを受け継いでいる。インヂュニアの特徴でもあった耐磁用の軟鉄製インナーケースを備えているのは、新コレクション中、このモデルのみとなっている。自動巻き、Cal.30110（21石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約42時間）を直径40mmのステンレススチール・ケースに搭載する。12気圧防水。価格52万5000円。4月発売予定。



「インヂュニア・コンスタンスフォース・トゥールビヨン」。新しいインヂュニア・コレクションの中で話題となったのが、今回新たに加わったフラッグシップ、「コンスタンスフォース・トゥールビヨン」である。その特徴は凝りに凝ったムーンフェイスと、コンスタンスフォース機構付きのトゥールビヨン・エスケープメントを装備している2点だ。プレス・リリースに「精密なメカニズムを備えたパワーマシン」と謳われるように、12気圧防水を装備した46mmのプラチナ&セラミックス製ケースに、4日間のロング・パワーリザーブをもつ手巻き式のCal.94800（43石、1万8000振動）を搭載。メカニズム面の大きな特徴はふたつあり、ひとつがトゥールビヨン・ケージの中に、精度を安定させるための定力装置、つまりコンスタンスフォース機構が組み込まれていることである。パワートレインから脱進機に伝達される駆動力を一定に保つため、その力はヘア・スプリングに蓄えられて一端調整されたのち、エスケープメント・ホイールに伝わる。この際にヘア・スプリングは1秒間に1回伸縮し、トゥールビヨンの秒針も1ノッチ進む。この機構は2011年発表のポルトギーゼ・シデラーレ・スカフージャから流用したもの、バレルのトルクが最も良い状態で伝えられる約48時間だけ作動を続ける。もうひとつは、ムーンフェイスで、まず3Dレーザーを使って加工された月の表面は、細かなクレターまで再現されており、その誤差は約577年で僅か1日しかない。また月齢表示は南北両半球に対応しており、さらに珍しいところは次の満月までの残り日数を示すカウントダウン表示がプリントされる。パワーリザーブ計装備。予価2457万円。11月発売予定。

オリス・アクイスイス デプスゲージ

# 水の浸入で深度を計測する 初のダイバーズ・ウォッチ

メカニカルダイバーズ・ウォッチに画期的な機構が登場した。サファイア風防内に敢えて水を浸入させ、内部の空気を圧縮させながら水深を測るといふ新発想の水深計だ。

ORIS Diving Reaches New Depths



## アクイス デプスゲージ

自動巻きCal.733。パワーリザーブ約38時間。ステンレスチール・ケース。ラバー・ストラップ。500m防水。ケース径46mm。交換用のSSブレスレット、ストラップ交換用の専用工具が付属した特許防水ケース付き。予価37万8000円



タルを採用し、さらにその側面12時位置から1〜2時位置にかけて、反時計回りに導水管となる溝が設けられた。潜水時になると外部に通じる12時位置の穴からこの溝に水が浸入し、導水管内の空気を水圧で圧縮する。すると文字盤外周の溝が水によってダークグレーに変色し、水と圧縮された空気(ライトグレーの部分)の境目の目盛りが、現在の水深を示してくれる。つまり、サファイアの溝に入った水と空気がインジケーターの役割を果たしてくれるのだ。

この深度計のすぐれている点は、ダイビング・コンピューターのようにバッテリーを必要としないこと。そして、タイムロスすることなく即座に現在の水深を示してくれるため、水面近くに浮上して減圧する際に非常に有効なことが挙げられる。ちなみに防水性能は500メートルだが、深度計の計測範囲は最大で100メートルまで。しかし、レジャーでダイビングを楽しむ人たちにとっては、十分な機能といえるだろう。



オリス会長ウーリック W.エルゾック。1978年オリスに入社。マーケティングマネージャー、マーケティングディレクターを経て、2001年より現職。

搭載されているのである。「温度が一定ならば、一定量の気体の体積は圧力に反比例する」というのは、ボイルの法則だが、このダイバーズ・ウォッチは、まさにその法則が応用されている。風防には平均的なものよりも50パーセント厚い、特殊なサファイアクリス

れば万全である。スキューバ・ダイバーの多くが深度計測の可能なダイビング・コンピューターを腕に装着することからも、水深計の重要性が理解できるはずだ。オリス会長ウーリック W.エルゾック氏が、革新的と豪語する「アクイスイス デプスゲージ」にはアナログ式の水深計が

信頼できるダイバーズ・ウォッチの条件を挙げると、高い防水性、視認性、すぐれた操作性という3つであることに異論をさしはさむ余地はないだろう。もし、これにもうひとつ加えるなら水深計。つまり自らが現在どれほどの深さに潜っているのか、それを計測する機能を備えて



PRESSURE RESISTANT  
50BAR/500M  
DEPTH GAUGE

文字盤外周の溝が導水管となり、浸入した水(ダークグレーの部分)と空気(ライトグレーの部分)の境目で目盛りを判読する(上)。アイデアはオリスの開発チームが考案し、専門メーカーによってクリスタルは作られた。断面図(左)のブルーの部分が溝(導水管)だ。

